

介護福祉に関する体験型授業の試みを通して

～KUSEP 日本文化・社会学習プログラム科目「日本における介護福祉の現状」について～

小島 莊一^{※1}

要 旨

本稿では日本文化・社会学習プログラムの授業科目として、2015年度秋学期より開講されている「日本における介護福祉の現状」について、これまで三学期間にわたり実施してきた授業の内容と変遷を報告している。この授業では、講義として日本の介護福祉の現状を学ぶとともに、留学生が実際に介護福祉施設を訪れ、高齢者と触れ合ったり現場の状況を肌で感じたりすることを目的としている。日本の高齢者と交流することは、留学生にとって貴重な体験であり、学習後に学生が提出する感想文の内容から、今後の課題についても述べている。

【キーワード】 介護福祉、高齢化社会、体験学習、高齢者との交流、介護体験学習

I. はじめに

日本は世界でも有数の高齢化社会であると言われている。総務省統計局のデータによると、平成2（1990）年には総人口約1億2,360万人中に占める65歳以上の人口（老年人口）は約1,490万人で、その割合はおおよそ12.1%であった^{※2}。しかし、それから四半世紀近くが経過した平成26（2014）年になると、総人口が約1億2,700万人とほとんど変化していないのに対して、老年人口は約3,300万人とわずか24年で倍増しており、その割合もおおよそ26%にまで達している。この割合はドイツやイタリアなどの高齢化社会の進んでいる先進国よりも高く、日本は世界に類を見ない急激な速度で高齢化が進んでいると言われる。

こうした中で、日本では高齢者の介護福祉に関する様々な社会問題が発生している。介護福祉や医療における社会保障費の増大、施設における人手不足、在宅であれば老老介護、そして虐待、事例を挙げれば枚挙にいとまがないであろう。しかし、大学のキャンパス内ではなかなかこうした問題と接する機会は少ない。特に留学生センターに所属している短期留学生たちは、日常のキャンパス生活の中で高齢者に会うこと

は極めて稀である。

金沢大学短期留学プログラム A (KUSEP) では、毎年世界各地から留学生を受け入れ、日本語教育 (総合日本語プログラム) とともに日本の文化や社会について学ぶ授業科目 (日本文化・社会学習プログラム) を開講している。このプログラムでは大学内に止まらず、広く校外に出て様々な体験をする授業科目が多く、金沢に多い伝統文化の体験や歴史的遺産の見学など多岐にわたる豊富な授業科目が開講されている。しかし、これまで高齢化社会や介護福祉についての授業科目はなかった。筆者は金沢大学に赴任する以前に介護福祉の仕事をしたことがある経験から、日本文化・社会学習プログラムの授業科目として、2015年度秋学期より「日本における介護福祉の現状」を開講した (2017年度からは「日本の介護福祉におけるコミュニケーション」に名称を変更する)。これは講義として日本の介護福祉の現状を学ぶとともに、留学生が実際に介護福祉施設の現場を訪れ、高齢者と触れ合ったり現場の状況を肌で感じてもらうことを目的としたもので、大学のキャンパス内ではなかなか接することのできない高齢者と交流することは、留学生にとっても貴重な機会になるだろうと考えたためである。

本稿ではこれまで三学期間にわたり実施してきた授業の内容と変遷を実践報告としてまとめ、また体験学習ごとに学生に提出してもらっている感想文の内容などを紹介して、今後の課題についても述べたい。なお、日本文化・社会学習科目はジョイントクラスとして開講されているため、一般学部等の学生も受講することができ、そのため履修学生の中には日本人学生も含まれる。また、介護福祉のみの授業を開講しているのは秋学期だけで、春学期には「サービス業や福祉施設にみるおもてなしの心」という授業を開講している。本稿では春学期の授業については、介護福祉に関して行われる部分のみを扱う。

II. 授業科目の概要

本節では「日本における介護福祉の現状」の授業概要について、一学期間のスケジュール、履修学生の内訳、校外体験学習、これまでの変遷などについて報告する。

1. 一学期間のスケジュールと校外体験学習

この授業は2015年度秋学期に初めて開講されたが³、それ以来每学期月曜日の3・4時限 (13:00~16:15) に開講されている。ただし、これは校外に体験学習に行く場合のことであり、教室で講義を行う場合には3時限 (13:00~14:30) のみの開講と

なる。全16週（90分×16回）の授業であるため、体験学習の日は2回分の授業となり、その調整のため学期中であっても開講されない週もある。体験学習の実施日は先方の施設との話し合いによって毎学期変わるため、一学期間のスケジュールは学期によって異なる。また、クォーター制による半学期間だけの受講はできない。参考として、2016年度秋学期における一学期間のスケジュールを以下の表に例示する。

回	日付	トピック	内容
1	10/3	オリエンテーション	授業ガイダンス・グループ分け
2	10/17	準備活動	体験学習に向けての準備・話し合い
3・4	10/24	第一回校外体験学習	介護福祉士による日本の介護福祉の講義
5	11/7	準備活動	体験学習に向けての準備・話し合い
6	11/14	準備活動	体験学習に向けての準備・話し合い
7・8	11/21	第二回校外体験学習	介護福祉施設での介護体験学習
9・10	11/28	第三回校外体験学習	介護福祉施設での交流体験
11	12/5	準備活動	体験学習に向けての準備・話し合い
12・13	12/12	第四回校外体験学習	介護福祉施設での交流体験
14・15	12/19	第五回校外体験学習	介護福祉施設での交流体験
16	1/16	総括	総括・感想文の提出

表に示したように、この授業では全16回の授業のうち、10回（180分×5回）は校外体験学習が実施され、教室で行われる授業は6回のみである。教室で実施されるものも、校外体験学習に向けての準備作業や話し合いなどが行われる場合が多く、基本的にこの授業は体験学習を重視した科目ということができよう。これは体験学習先としてご協力いただいている医療法人社団映寿会みらいグループ（以下、映寿会グループと記す）のご提案かつご厚意によるものである¹³。

そもそも筆者はこの授業において、教室での講義と校外体験学習を半々程度に実施しようと考えていた。まずは講義で日本の介護福祉制度や高齢化社会についてしっかりと学習し、その後に実際の施設へ体験学習に訪れるのがよいのではないかと考えていたからである。しかし、体験学習先として留学生を受け入れることを了承していただいた映寿会グループの理事長や介護福祉士の先生方と相談を重ねるうちに、せっかくの機会であるため、少しでも多くの体験をしてもらった方が留学生にとってよいのではないかと、というご提案をいただいた。確かに、この日本文化・社会学習プログラムの授業科目は、留学生に様々な体験学習をしてもらうことが一つの大きな柱になっており、留学生にできるだけ貴重な体験をしてもらうことが重要であると考えられるため、このご厚意に甘えることにした。

さらに介護福祉全般に対する概説的な講義も介護福祉士の先生に担当していただけることになり、これを教室での講義から校外体験学習の一つへと置き換えることで、体験学習の回数が当初の想定よりもかなり多くなったのである。結果的には学生たちは何度もの校外体験学習について、非常に興味を持って真剣に取り組んでいた。こうしたことから、この選択は正解だったと考えている。

2. 授業の変遷と学生の内訳

まず、この授業の校外体験学習で訪問している施設について述べておく。介護福祉には主なものだけでも、常時の介護を必要とする人を対象とした公的施設としてのいわゆる特養（介護老人福祉施設）、一方で主に民間企業が運営するのが介護付き有料老人ホーム、リハビリ療養を主目的とした介護老人保健施設、認知症の高齢者を対象としたグループホームなどの施設をはじめ、高齢者の居宅を訪問して介護を行う訪問介護サービス、高齢者が送迎を受けて施設に通う通所介護サービス（デイサービス・デイケア）、一時的に居宅での生活が難しくなった高齢者が施設に入所する短期入所サービス（ショートステイ）、また訪問・通い・入所を組み合わせた小規模多機能型居宅介護など、その目的や用途により実に様々な種類のものが存在する²⁴。

この授業にご協力いただいている映寿会グループには、特養・介護老人保健施設（通所介護サービスを併設）・介護付き有料老人ホーム・訪問介護・短期入所サービスなど多くの施設と制度があるが、その中でも今回の校外体験学習では「介護付き有料老人ホームみらい鞍月」（以下、「みらい鞍月」と記す）と「介護老人保健施設みらいのさと太陽」（以下、「みらいのさと太陽」と記す）を訪問することになった²⁵。これは介護福祉士との相談の結果決定したもので、利用している高齢者の介護度や介護スタッフの人数、スケジュール的な都合などを勘案して決められたものである。

次に履修学生の内訳についてであるが³、2015年度秋学期には5人、2016年度春学期には14人、同秋学期には15人の学生がこの授業を履修した。うち、日本人学生はそれぞれ1人、6人、2人であった。

この授業では介護福祉施設を訪問するため、あまり多くの学生を受け入れることはできない。訪問先の施設側は月曜日の午後というのは通常サービス中であり、介護福祉施設というものは分単位でスケジュールの決まっている忙しい現場である。そこへ大勢の学生が押し掛けることは、先方からしてみれば業務の阻害になることが多く、最小限の人数で訪問することが望ましい。また、実際にこの授業を履修する学生がたくさんいるとも思えなかった。このため、この授業を開講した当初は数人程度の履修学生で実施することが適切だと考えていた。

しかし2016年度になると、予想に反して履修を希望する学生が大幅に増え、全員で一度に一つの施設を訪問することは困難な状況となった。抽選で履修者を選別することも考えたが、初回の授業ガイダンス時に学生に聞くと、どの学生も熱心に履修したいと希望する。こうした状況を先方の介護福祉士と相談した結果、2016年度からは学生をグループ分けし、グループごとに訪問を実施することが決定した。一度に一施設を訪問する人数は、4名～8名程度が望ましいため、今後も履修学生が9名を超える場合はグループ分けを実施することにしている。また、訪問する施設は二ヶ所であるため、履修希望者が17名を超える場合は残念ながら抽選を行う予定である。

各グループには留学生と日本人学生ができるだけ均等に振り分けられる。また、日本人学生には各グループのリーダーを担当してもらう。この授業では、教室で実施される回には校外体験学習に向けたグループごとの話し合いや準備作業が行われるため、リーダーには各グループの司会や取りまとめをしてもらう。また、施設の状況は日々変化しており、予定の急な変更もあるため、筆者は常にリアルタイムで介護福祉士の先生方と連絡を取り合っており、急な変更や連絡事項に関してはリーダーを通して各グループメンバーへの伝達が行われる。2015年度秋学期には1人いた日本人学生がリーダーを務め、2016年度春学期には6人の日本人学生が3人ずつに分かれ、その中から1人ずつリーダーが選出された。また同秋学期には2人の日本人学生がそれぞれのグループのリーダーとなっている。

次に留学生の出身国の内訳を以下の表に示す。

2015年度秋学期			2016年度春学期			2016年度秋学期		
出身国	性	数	出身国	性	数	出身国	性	人
中国	男	1	中国	男	2	中国	男	1
	女	1		女	2		女	8
インドネシア	男	1	インドネシア	女	1	タイ	女	1
ポーランド	女	1	インド	女	1	ベトナム	女	2
			タイ	男	1	ドイツ	男	1
			ベトナム	女	1			
合計		4	合計		8	合計		13

表からも明らかなように、この授業を履修する留学生では、アジアからの学生が圧倒的に多数を占めている。この授業は、第一節で述べたようにKUSEPの開講している授業であり、KUSEPに応募できる留学生は金沢大学と大学間または部局間で学術交流協定を締結している大学等に在籍していなければならない。2017年1月現在、締結のある国と地域は38に上っており、実際にKUSEPに所属している留学生の出身国も

様々だ⁶。決してアジアからの留学生ばかりに偏っているわけではなく、ここ三年の留学生をアジアとそれ以外の国に分けた場合、2014年度秋学期来日者（第17期生）はアジア18人・それ以外23人、2015年度秋学期来日者（第18期生）はアジア人23人・それ以外17人、2016年度秋学期来日者（第19期生）はアジア人17人・それ以外20人と、おおよそ半々程度の割合になっている。

この授業の留学生が極端にアジア出身者に偏っている理由としては、まず第一に履修留学生がKUSEPの学生に限定されていないことが挙げられる。実際に各学期の留学生を見ると、2015年度秋学期では4人のうちKUSEP生が3人と大半を占めていたが、2016年度春学期になると8人のうちKUSEP生は4人と50%になり、同秋学期では13人のうち2人だけに減少した。正規生を含めた金沢大学全体の留学生をみると、2016年5月1日現在のデータでは全留学生557人のうち、アジア出身者が489人となっており、その割合は87%を超えている⁷。また、中でも中国人は217人とアジア人の中の半数近くを占めており、東南アジア各国の合計233人に匹敵する数となっている。こうした点を考えると、この授業を履修した学生がアジア人中心となるのも当然である。

また、第二点として、日本語の学習レベルの問題も挙げられる。この授業では校外に出て、介護福祉施設で高齢者と実際に交流活動をするため、日本語の学習レベルがある程度に達している留学生でなければ参加することは難しい。この授業では留学生センターが総合日本語学習プログラムで規定しているクラス分けの基準に従い、日本語の学習レベルがD判定（中級後半）以上の学生であることを履修の条件として設けている。そして、これを満たす留学生にはアジア出身者（特に中国人や韓国人）が多いことも現実である。実はこれまでもCレベル（中級前半）で履修を希望する留学生の相談を受けたことがあるが、Dレベルの学生であっても実際の交流の場面では高齢者との意思疎通がうまくいかず、困惑しているケースを見かけることが何度もあったため、許可しなかった。しかし一方では、そうした難しさを体験学習で実際に経験してもらうこともこの授業の重要な要素であると考えられる。今後、もう少し履修留学生の幅を広げるために、日本語の学習レベルの制限を緩めていくべきか、今後の検討課題として介護福祉士の先生とも相談していきたい。

なお、最後に性別についても少し触れておくと、履修学生では女性の割合の方が高い。これまでの三学期間の通算学生数は34人であるが、そのうち23人が女性であり、およそ68%を占めている。日本人学生だけで見た場合、男性が4人、女性が5人とその割合はあまり変わらないが、留学生の場合には男性7人に対して女性が18人となっており、割合は72%である。留学生に関しては女性の方が介護福祉に興味があるようである。

Ⅲ. 体験学習の内容

本節では、この授業の中核となっている校外体験学習について見ていきたい。前節までも述べてきたように、校外体験学習では学生は介護福祉施設を訪問するが、具体的には「みらい鞍月」と「みらいのさと太陽」を訪れ、そこで高齢者とレクリエーション活動を行ったり、発表を行ったりする。レクリエーション活動では、ゲームをしたり簡単な手作業（折り紙や切り絵など）をしたりしながら、高齢者との会話を通じて交流を体験する。また他にも、介護を具体的に体験してみるための学習もある。

1. 校外体験学習の変遷

2015年度秋学期と2016年度秋学期には、校外体験学習は合計五回ずつ実施された。第二節のスケジュール表にも示したように、2016年度秋学期の場合、五回のうち、介護福祉士による講義が一回（日本の介護福祉の制度、現状などについて）、また介護体験学習が一回行われ、残りの三回が高齢者との交流活動であった。二つのグループに分かれた学生たちは、それぞれが「みらい鞍月」か「みらいのさと太陽」のいずれかの施設を三回訪問し、それぞれが事前に準備していた交流活動を行った。しかし、こうした同じ施設を繰り返し訪問するシステムが、最初からとられていたわけではない。

2015年度秋学期においても、校外体験学習は五回実施され、そのうちの一回は介護福祉士による講義であった。しかし、当時は介護体験学習はまだ実施されておらず、残る四回がすべて高齢者との交流活動であった。また、当時は学生数が5人でグループが一つしかなかったため、両施設を二回ずつ訪問するシステムがとられた。また、2016年度春学期については、第一節でも述べたように介護福祉施設だけではなく、学生は料亭や保育園なども訪問し様々なサービス業の体験をするため、介護福祉施設で実施された体験学習は二回だけであり、そのうちの一回は介護福祉士による講義だった。すなわち、高齢者との交流活動が行われたのは一回だけであり、それぞれのグループが二つの施設のどちらか片方のみを訪問した。

2016年度秋学期の授業を開始するにあたり、介護福祉士の先生との相談の中で、留学生と高齢者との交流をより一層深めていくためには、それぞれのグループをどちらかの施設に限定して、繰り返し同じ施設を訪問する方がより密度の濃い交流ができるのではないか、という提案が出された。また、介護福祉の世界をより詳しく知ってもらうには、一回の講義だけでなく、もっと具体的な介護体験をしてもらうべきではないか、との意見も出た。こうして新たに介護体験学習が一回設けられ、高齢者との交流活動は計三回となった。そしてそれぞれのグループが、どちらか片方の施設を三回

連続で訪問するというスケジュールが組まれたのである。

こうして同じ施設に集中的に通うという方式が実施されたのであるが、結果としてこれはよい効果を生んだようである。学生が施設を訪問すると、基本的に高齢者の方々はいつも喜んでくださるのだが、2016年度秋学期に関しては繰り返し訪問することでお互いの名前を覚えるほどに連帯感が生まれ、第三回目の訪問のお別れの時には涙ぐむ高齢者の姿も見られた。学生側でも自主的に記念の寄せ書きを作成して高齢者にプレゼントするなど、これまでには見られなかった行動が表れ、また帰り道のバスの中では「もう訪問がないのが寂しい」といった声も多く聞かれた。今後も秋学期に関しては、このシステムを採用していく予定である。

ただし、一部の学生からは片方の施設しか訪問できないのであれば、最初に選ばせて欲しかったという意見も出た。確かに、これまでグループ分けは抽選によって行っており、どちらか一方の施設しか訪問しない場合の選別もリーダーによる籤引きなどで決めていた。初回の授業におけるガイダンス時に、介護付き有料老人ホームである「みらい鞍月」と介護老人保健施設である「みらいのさと太陽」の施設としての違いも概説はするが、実際に訪問する前の留学生にはその違いは明確には分からないため、選ばせることにはあまり意味はないと考えていたためだ。しかし、こうした声が出たことを考慮するならば、今後はグループ分けの前に各施設の概要を説明し、学生に自ら選ばせる方法をとるべきかもしれない。そうした上で、片方の施設に人数が偏った場合には抽選を実施する方法をとることにしたいと考えている。

2. レクリエーション活動と学生の発表

まず、一回の校外体験学習の流れを見ておくと、大学の専用バスによる施設までの移動にはおよそ30分の時間がかかる。3・4時限（13:00～16:15）は途中の休憩も含めて3時間15分に及ぶ長丁場であるが、そのうち1時間はバスの往復により消費されることになる。その他にもバスの乗り降りや徒歩での移動時間などを考慮すると、実際に交流活動に使える時間はおよそ2時間弱である。体験活動ではこれを前半と後半に分け、一回で二つの活動をすることを前提に準備作業を行う。

グループに分かれた学生はそれぞれどのような交流活動をするかを相談していくが、教師は基本的に学生の自由に任せる。もちろん質問には丁寧に答え、また過去の授業で行われた活動を例として紹介することはするが、学生に活動内容を強制するようなことはせず、学生に自分たちで活動内容を作り上げさせていく。ただし、規則によって、あるいは物理的にできない活動についてはその場でそれを説明し、変更させる。例えば、2015年度秋学期においては、高齢者と一緒に母国風のサラダを作り、み

んなで食べる活動をしてみたいという提案が出された。一見するととてもよい交流活動に思われるが、介護福祉施設ではこうした活動はできない。高齢者には糖尿病や高脂血症などの生活習慣病をはじめとした様々な病気を抱えている人が多く、その食事や摂取カロリーは管理栄養士によって厳しく管理されている。また、体力的に弱い高齢者の施設で万が一にも食中毒などが発生すると、大変な事態になる恐れがあるため、食べ物や飲み物に関する活動は実施できないのである。こうした介護福祉施設ならではの制限はいくつかあるが、学生に初めから禁止事項として伝えるのではなく、提案が出てから問題があることを伝え、それがなぜ問題なのかを考えさせることで高齢者や介護福祉に対する認識を深めてもらうことが大切である。

では、三学期間で実際に行われた交流活動について見ていきたい。下の表は交流活動を列挙したものである。

2015年度秋学期		2016年度春学期		2016年度秋学期	
交流活動	数	交流活動	数	交流活動	数
発表	2	発表	2	発表	3
双六ゲーム	1	双六ゲーム	1	双六ゲーム	2
折り紙	2	ジェスチャーゲーム	1	折り紙	2
拍手ゲーム	1			お誕生日会	1
切り絵	1			切り絵	1
昔話	1			風船リレーゲーム	1
				太極拳	2

まず発表についてであるが、これはこの授業を開講するにあたり、介護福祉士の先生との相談の中で毎学期の留学生に義務付ける活動としたものである。施設の高齢者にとっては、外国人と会うこと自体がとても珍しい体験であり、外国の伝統文化や自然の風景などはあまり目にすることがないものである。そうしたことから、留学生がそれぞれの母国の文化や景色についてのパワーポイントを作成し、高齢者の前で発表することになった。2015年度秋学期には一つのグループが、両施設でそれぞれ一回ずつ発表をした。2016年度春学期は各グループが片方の施設で一回だけ発表をした。そして同秋学期にも、各グループがそれぞれの施設で発表をしている。回数が3回となっているのは、この学期は留学生の数が多く、一回の発表で全員が担当することが困難であったため、一つのグループについては二回に分けて実施したためである。なお、日本人学生は基本的には発表はせず、留学生のパワーポイント作成を手伝ったり、発表原稿の日本語をチェックしたりするが、中には金沢大学の角間キャンパスについての発表を行った者もいる(高齢者の中には、移転前の古い金沢大学のイメージしか持つ

ていない方も多いため)。

この発表活動を通して、学生は通常の大学での講義やゼミにおける発表とは大きく異なったパワーポイントを作ることになる。高齢者には視力の弱い方が多く、文字は極力少なくして使うとしても大きなサイズで書き、またできるだけ写真などを多く使用したシンプルで見やすい資料を作らなくてはならないのだ。こうしたパワーポイント作りを通して、学生は高齢者の身体的特徴や、接する場合の注意点などについて学んでいくことになる。

その他で毎学期実施されているのが双六ゲームである。これは2015年度秋学期の最初のグループが「Snakes & Ladders」という西洋の双六ゲームをしてみたいと提案し、自分たちでゲーム盤やコマなどを用意した。基本的にはサイコロを振って出た目の数だけ進み、一番早くゴールに到着したものが勝ちであるが、少しおもしろくするために、このグループはいくつかのマスに印を付け、そのマスに止まった場合は質問カードを一枚引かなければいけないという独自のルールを設けた。質問カードも学生たちが自分で用意したが、質問としては「初恋の相手は誰ですか」、「人生でした一番大きな失敗は何ですか」などの少し恥ずかしい質問が用意された。このゲームが高齢者との交流活動ではとても好評で、質問でお互いに大いに盛り上がったことから、その後の学期の学生も導入している。ゲーム盤やコマは補強しながら2015年度秋学期以来のものを受け継ぎ、質問カードなどは新しいものを作り直して使用している。

折り紙や切り絵は手作業をしながら、会話を進めていく交流活動である。高齢者の中には女性を中心にこうした手作業が非常に上手な方々があり、留学生は折り方や切り方を教えてもらいながら、同時に自分の母国や日本の話題をしていく。高齢者の中には積極的な方々もおられ、母国のことについて質問攻めにされる留学生の姿も見られた。

拍手ゲームやジェスチャーゲーム、風船リレーゲームは体を動かしながらできる簡単なゲームで、拍手ゲームでは椅子を円に並べて内向きに座り、順番に数を数えながら一回拍手をする。ただし、三の倍数の人は拍手をせずに数字を数えねばならず、間違えて拍手してしまった場合は負けとなって罰ゲームとして恥ずかしい話をしたり、歌を歌ったりしなければならないというものである。ジェスチャーゲームは学生たちが声を出さずに身振り手振りだけで何かを表現し、高齢者がそれを当てるというもの。また、風船リレーゲームは音楽に合わせて風船を次々と隣の人に渡していき、音楽が止まった時に風船を持っていた人が負けというゲームで、こうした体を使った簡単なゲームは、介護福祉施設のリハビリ療法の一つとしても広く行われている。

太極拳は2016年度秋学期に初めて導入されたもので、「みらい靱月」で毎日午後に行

われている体操の時間にやってみてはどうかと介護福祉士から提案され、中国人学生がお手本となり、高齢者は椅子に座ったまま、上半身の動きだけに簡略化して実施したものである。普段の体操とは異なる独特な動きに、高齢者は興味を示していた。

最後はお誕生日会であるが、これは毎月一回実施されているその月にお誕生日がある高齢者を祝う会が、たまたま体験学習の日時と重なったもので、学生たちもお誕生日会に参加して高齢者のお誕生日を祝い、交流を深めた。

こうした交流活動の内容は、校外体験学習の回の合間に行われる教室での準備作業において、何度も練り直され、細かな変更が加えられていく。最初の段階では、学生たちは施設の高齢者に対する具体的なイメージがほとんどなく、提案される活動もなかなか実施困難なものが散見される。学生たちにとって、身近な高齢者といえば自分たちの祖父母であるが、彼らの年齢はまだ60代程度であり、高齢者といっても実際には普通に生活が送れている人々である。一方で施設の高齢者は80代以上の方がほとんどで、90代も多く、中には100歳を超える人もいる。学生たちが学期開始時に抱いている高齢者に対するイメージは、そもそも間違っているのである。一回目の交流活動を経て、学生たちは自分たちのイメージの誤りに気付き、予定していたその後の交流活動の大幅な修正を余儀なくされる。こうした言葉で教えられた知識ではなく、実際に自分たちで体験して得た知識は、彼らのその後の活動に対して大きなプラスの影響を与えるのである。

3. 介護体験学習

もう一つ述べておきたいのが、2016年度秋学期から開始された介護体験学習である。それまでこの授業を履修していた学生は介護福祉士による講義と、高齢者を行う交流活動のみを体験していた。しかし、先述したように、より介護福祉や高齢者施設に対する理解を深めてもらうためには、もう少し具体的な介護の方法についての体験学習もするべきではないかとの提案があり、この学期から一回の校外体験学習を介護体験学習として開催することになったのである。

もちろん、資格を持たない留学生たちが、実際に高齢者を相手に介護を実施することはできない。ここでは、介護士の資格を取得するための介護福祉士初任者研修などのプログラムでも広く実施されている、学生（受講生）同士による介助訓練を取り入れることにした。その中で、2016年度秋学期に実施したのは、衣服の着脱介助、食事介助、車椅子介助の三つである。

まず、衣服の着脱介助であるが、これは文字通り要介助者の衣服の着脱をサポートする介助であり、介護士として必要なもっとも基本的なスキルの一つである¹⁸⁾。特に

半身麻痺によって体の片側が麻痺している要介助者の着脱介助を学ぶ必要があり、今回も同性同士で学生にペアを組ませ、片方は半身麻痺役、もう片方は介助者として練習した。ここで重要なのが「脱健着患」と呼ばれる技法であり、脱ぐ時は健康な側（麻痺していない側）から先に脱ぎ、着る時は患部（麻痺している側）から先に着なければならぬ。学生たちは実際に体験してみることで、半身麻痺の人の衣服の着脱介助がいかに難しいかを実感し、また「脱健着患」の有効性を知るのである。

次に食事介助であるが、高齢者には視力が極端に弱い人、まったく見えない状態の人なども多く、食事のサポートは重要な介助の一つである¹⁸⁾。再びペアになった学生は、片方がアイマスクをして高齢者を演じ、もう片方が介助者として食事を介助する。高齢者の食事においては、誤嚥性肺炎を引き起こすことのある加齢による嚥下障害と、食べ残しに繋がってしまう脳の障害による半側空間無視に対する注意がもっとも重要である¹⁹⁾。体験学習ではそこまで専門的な練習はなかなかできないが、アイマスクをすることによって味覚が不確かになるという体験は全学生が実感することができた。三種類の味の違うゼリーで食事介助を行ったのであるが、アイマスクをしながらすべての味を正確に言える学生はほとんどいなかった。こうした高齢者の不便さを実体験することも、介護福祉の入口としては重要な体験となるであろう。

最後は車椅子介助であるが、これも介護福祉においては基本的な介助である²⁰⁾。2016年度秋学期の留学生の中では、交通事故で車椅子に乗ったことがある、という学生はいたが、車椅子を押したことがあるという学生は一人もいなかった。それだけ、今の若い人にとって車椅子は身近なものではないのであろう。しかし、イメージと実際にやってみることはまったく違うのであって、実際に車椅子介助をしてみると、学生は様々なことに気付かされる。車椅子介助で重要なのは、室内ではなく屋外の介助である。普段はまったく気にも留めていない小さな段差や僅かな溝が、どれほど車椅子にとって不便なものであるのか。これは車椅子介助を実際にしてみて、初めて気付くことである。また、下り坂を下りる際にも注意が必要である。始めは学生たちはそのまま前進して下り坂を下っていかこうとするが、これは車椅子に乗っている要介助者にとっては相当な恐怖を感じる行為である。実際に急な勾配であれば、乗っている要介助者が前方に投げ出される危険性もある。車椅子にいったん加速がついて下り始めると、人間一人の体重を乗せた車椅子を、介助者一人では容易に止めることはできないのだ。体験学習ではそこまで急な坂で介助体験を実施することはしないが、実際に緩やかな坂であっても、乗っている学生は前方に押し出されるような感覚を味わい、声を上げる学生も見られた。実際には向きを逆にし、後退しながら下り坂を下りることが正しい介助方法である。こうした体験も自ら実感することで、より内容豊かな体験

として、学生たちの記憶に残るものと思われる。

さて、こうした介護体験学習は、2016年度秋学期になって初めて実施されたものであった。結果として、学生にとっては貴重な体験となったようだ。どんなことでも、実際に自分で体験してみると、想像していたよりも難しいものであることが少なくない。こうした体験は、学生に介護福祉に対するより深い認識を与えるものであり、今後も実施していこうと考えている。

IV. おわりに

これまで KUSEP の日本文化・社会学習プログラムのもとで開講されている「日本における介護福祉の現状」という体験型授業科目の内容や変遷について述べてきた。実際には講義よりも、施設の高齢者との交流体験活動の方が授業の内容の中核を占めているため、2017年度秋学期からは「日本の介護福祉におけるコミュニケーション」に名称を変更する予定である（春学期には「サービス業や福祉施設におけるおもてなしのこころ」が開講される）。本節ではこれまでこの授業を履修してきた学生に、校外体験学習ごとに提出してもらっている感想文の内容を見ながら、今後の課題について少し考えてみたい。

1. 感想文について—1. 初回の体験学習を終えて—

これまでに提出された感想文は全部で128に上る（2015年度秋学期：5回×5人＝25、2016年度春学期：2回×14人＝28、同秋学期：5回×15人＝75）。筆者はすべての感想文を注意深く読んでいるが、次第にその中にいくつかの傾向が見て取れることが分かってきた。ここで、よくあるパターンの感想文を以下に示し、その内容について見ていきたい。まずは初回の校外体験学習（介護福祉士による講義）を終えての感想文から二つを紹介する。

今日の授業で、医療と介護の違い、日本の社会保障、世界各国の高齢化率と介護現状など様々な知識を教えていただいて、たいへん勉強になりました。

また、老人ホームに見学して、日本の老人ホームには、介護レベル、費用など標準によって、いくつかの種類があるということが知りました。日本の老人ホームは本当にきれいで、まるで家のように雰囲気がいいと思います。

これからの体験授業、とても楽しみにしています。

今日の講義を聞いて、まず「医療」と「介護」との区別がちゃんとわかるようになる。また中国と日本の間に、「介護施設」に多大な差があることがしみじみに覚えた。今日日本の整った介護施設を見学し、専門家の指導のもとでリハビリしている老人たちの姿を見てとても感心した。中国では今は「家族介護」の型が普通で、お年寄りを老人ホームとか置くのはなんか見捨てたような感じがする。中国社会では非難される恐れがある。しかし、今日日本の介護施設を体験し、中国もこれから介護の面において、日本のいいところを勉強すべきと思う。以上です。

上記の二つの感想文はいずれも初回の体験学習後に書かれたものである（原文のまま掲載しているので、日本語に誤りがある、以下同じ）。これは初回の体験学習後に非常に多い感想文のパターンであり、介護福祉士の講義に関する感想と、施設を見学した感想が記されている（一回目の校外体験学習では、介護福祉士による講義のあと、時間が許せば実際に各施設を見学して回る）。

アジアからの留学生の履修者が非常に多いこの授業では、多くの感想文に共通するのは以下の二点である。

1. 介護制度についてまったく知らなかった
2. 日本の介護福祉施設がとてもきれいなので驚いた

また、二つ目の感想文にあるように、中国人留学生である場合には、次のような内容も多い。

1. 中国では施設に預けるのは、まだまだ悪いことだというイメージがある
2. 中国も日本の介護施設を見習うべきである

こうしたことから読み取れるのは、アジア諸国にとって高齢化社会の問題と介護福祉制度はまだ身近なものとしては認識されていない、ということである。一人っ子政策をずっと続けてきた中国では、東南アジア諸国よりは高齢化社会が進んでいるが、上記の感想を見ると、まだ以前の日本に近い状態に留まっていることが分かる。

これまで、西洋からの履修者となった数少ないポーランド人とドイツ人の留学生は、こうした東南アジア諸国からの留学生の持つ認識に驚きを隠せず、「東南アジアには高齢化の問題がないということはびっくりでした」と書いている。このように留学生の出身国の違いによって、介護福祉に対するイメージには大きな差がある。西洋では自立生活が送れなくなった高齢者が施設に入ることは普通であり、そこに悪いことだというイメージを持つ家族はいない。これは子供は一定の年齢になると実家を出るものであり、その後は別々の家庭を築くものだという認識が広く普及しているからであろう。一度家を出た者が、高齢者となった父母などの家族の面倒をみることはしないの

である（もちろん週末など、定期的に施設を訪問し、両親や祖父母との交流を持つことは当然である）。

今後のこの授業の課題として、こうした東南アジアからの留学生に正しい介護福祉に対する認識を持ってもらえるような授業を進めていくことが挙げられる。たとえ今はまだでも、東南アジアの国々であっても、先進国と同じような道を進むことになれば、高齢化社会から逃れることはできない。現実には今の留学生と話していても、東南アジアでも晩婚化や非婚化の流れは少しずつ進んでいるという。彼らは将来、母国で活躍する貴重な人材であるから、こうした問題に対する正しい知識を得てもらい、将来の介護福祉制度と高齢化社会に対して正しい対処ができるようになってもらいたい。

2. 感想文について—2. 介護体験学習を終えて—

次に2016年度秋学期から始まった、介護体験学習の感想文について見ていきたい。ここで多かった事例を一つ挙げる。

今日の授業は介護の体験をしました。

専用の食べ物、飲み物を食べてみて、本当にあまりおいしくないと思います。服の着替えや車椅子を押すことも思ったより大変だったです。しかし、今日の体験で今回介護する時、何をすべきか、どうすればいいか、何となくイメージができました。

このように介護体験を経て、介護をするということがどういうことなのか、おぼろげながらも分かってきたと書いている感想文が多く見られた。これは介護体験を授業に取り入れたことによる大きな成果だと思う。他にも、「これから自分の祖父母と両親に対する介護方も少しずつ身に付けました」や「私のおばあさんを思い出した。遠い中国でのおばあさんに会いたいです」など、実際の自分の家族に当てはめて問題を考えられるようになってきている学生も見られた。こうした実際に自分に身近な問題として介護福祉を認識できるようになったことはとても重要である。この介護体験学習は、今後も介護福祉士の先生と相談しながら、内容を充実させて続けていきたい。

3. 感想文について—3. 最後の交流体験を終えて—

最後に、最終回の交流体験学習を終えた後に、学生たちが提出した感想文を見ていきたい。とくに第三節でも述べたように、2016年度秋学期の体験学習では、同じ施設

に三回連続で通うというシステムをとったため、最終的には学生と高齢者の間に大きな連帯感が生まれ、感想文も感動的なものが多くなった。二つを以下に紹介したい。

時間のたつのはほんとうに速いですね。もう3回の体験が終わった。おばあちゃんたちとも親しくなってきた。みんな一緒に太極拳をやり、折り紙をし、とつても大切な思い出になった。今日ももともとおばあちゃんたちとゲームをやるつもりだったが、おばあちゃんたちはもつとみんなと話したいと言って、座談会みたいなものになった。そして最後、うちのグループメンバーと一緒に作ったプレゼントを送った。おばあちゃんたちもとても嬉しかった。そしてエレベーターまで私たちを送ってくれた。ほんとうにありがとうございます。みんながずっと元気であるようにお祈りする。

今日はみらいのさと太陽に行き、お年寄りと最後の交流体験をしました。

これまでみらいのさと太陽のみなさんと一緒に四回の交流活動をしたため、ゲームなどはうまく進んでいきました。特に知り合いになったおばあさんとおじいさんはやさしくて声をかけてくれたり、折り紙を教えてくれたりして、心から感動しました。

楽しい時間はいつも一瞬なので、今学期の交流体験はこれで終わりになりました。悲しいですけど、本当にいい思い出になりました。ありがとうございます。

ほとんどの感想文には、体験授業が終わってしまうことが寂しいという内容が書かれ、僅か三回の交流体験であっても、お互いに深く交流できたことが見て取れる。他にも、「もし未来で機会があったら、もう一度ここに来たい、みんな友達になりましたという気持ち、きっと永遠に覚えています」や「この授業の経験が貴重な思い出になりました。もしボランティアなどをやる機会があるなら、もう一度行きたいです」など、今後もチャンスがあれば施設を訪れてみたいという内容も多く見られた。

また、「話すより老人たちの話をちゃんと聞く方が大事である」と書いたものも見られ、驚かされた。これはまさに「傾聴」の姿勢であり、介護福祉では極めて重要なこととして、初任者研修プログラムでも何度も指導されることである。しかし、今回のこの授業では、傾聴については一度も扱っていない。留学生が自らそのことに気付いたということは、とても大切なことであり、他人とのコミュニケーションにおいて、相手の話をきちんと聞くという姿勢は、介護福祉に限らず人間同士のコミュニケーション全般においても、とても重要なことなのではないかと考えられよう。

以上、「日本における介護福祉の現状」(以後は「日本の介護福祉におけるコミュニケーション」と改称)について、これまで三学期間にわたって開講されてきた授業の内容について概観してきた。この授業はまだまだ発展途上であり、今後も介護福祉士の先生方とのコミュニケーションを続けながら、よりよく発展させ充実した授業科目にしていきたいと考えている。

【謝辞】

この授業の開講に当たり、映寿会グループの北元理事長にはたいへんお世話になりました。突然、一方的に体験授業の申し出を行ったにもかかわらず、快く引き受けて下さり、また懇切丁寧に話を聞いて下さった上で、的確なアドバイスと多くのご提案もいただきました。心よりお礼を申し上げます。

また両施設の施設長をはじめ、介護福祉士の地原先生と笠間先生には何度も助けていただきました。お忙しい中、たびたび施設を訪れ、ご相談に乗って下さったことに、心より感謝を申し上げます。

スタッフの皆様にも、介護業務の最前線でお忙しい中、みな笑顔を絶やさず、留学生に優しく接していただいたこと、本当にありがとうございます。今後もこの授業は続いていきますが、何卒よろしく願い申し上げます。

【註】

- 1 金沢大学国際機構留学生センター
- 2 総務省統計局ホームページ「人口推計」より(参照日:2017年1月30日)
< <http://www.stat.go.jp/data/jinsui/index.htm> >
- 3 映寿会グループは映寿会みらい病院を中心とし、医療・介護・教育など幅広く地域に貢献しているグループである。映寿会みらい病院は、石川県金沢市鞍月東1-9にある。詳細は以下のホームページを参照のこと。
< <http://eijukai-mirai.jp/> >
- 4 介護職員初任者研修テキスト編集委員会「介護職員初任者研修テキスト、第一分冊・理念と基本」第一章「職務の理解」、第一節「多様なサービスと介護職の仕事」(介護労働安定センター、2012年12月初版・2013年10月第三版)
- 5 それぞれの施設の詳細については以下のホームページを参照のこと。
みらいのさと太陽 < <http://mirainosato-taiyou.com/> >
みらい鞍月 < <http://eijukai.jp/sh-mirai-kuratsuki/#> >
- 6 金沢大学ホームページ「国際交流・留学」「国際ネットワーク」より(参照日:2017年1月30日)
< <http://sgu.adm.kanazawa-u.ac.jp/international/agreement/university.html> >
- 7 金沢大学ホームページ「大学概要」「国際交流ー外国人留学生受入状況」より(参照日:2017年1月31日)
< <http://www.kanazawa-u.ac.jp/overview/38908> >
- 8 ガイドヘルパー技術研究会監修「ガイドヘルパー研修テキスト、全身性障害編」第七章「生活行為の介助」(中央法規出版、2007年3月初版・10月第三版)
- 9 一つの介助方法として、クロックポジションと呼ばれるものがある。これは食事をするテーブルの上を時計の文字盤に見立て、何時の方向に何が置いてあるのかを要介助者に説明する介助方法である。

同行援護従業者養成研修テキスト編集委員会『同行援護従業者養成研修テキスト』第十章「場面別技能」
「1. 食事」(中央法規出版, 2012年5月初版・2013年9月第五版)

- 10 半側空間無視では, 片側からの情報をまったく認識することができないため, 例えば食事などにおいては, お盆に乗った料理の片側(多くの場合は左側)にまったく手を付けず, そのまま残すといった症状がみられるようになる。
- 11 ガイドヘルパー技術研究会監修『ガイドヘルパー研修テキスト, 全身性障害編』第六章「移動介助の基本技術」(中央法規出版, 2007年3月初版・10月第三版)

An Attempt about the Active Learning Class "Nursing Care": KUSEP Program for the Study of Japanese Culture and Society "Nursing Care to Elderly People in Japan"

Soichi Kojima

Abstract

The number of international students at Kanazawa University is increasing every year, and the International Student Center holds many active learning classes for various themes of Japanese culture and society. The author has experience to work in the field of nursing care, therefore he started the active learning class "Nursing Care to Elderly People in Japan" in Autumn Semester 2015.

At the university, the international students rarely have the opportunity to come in contact with elderly Japanese people, therefore this class gives them a good chance to talk to and communicate with old people in Japanese, which may be something different from the language they read in their textbooks. And they also have the chance to learn about nursing care systems for aged people, and about the problems of an aging society. In this class, most of the international students are from China and Southeast Asian countries. In general, these students have no clear idea about these serious problems, and so it is very important for them to realize these problems.

In this paper the author describes the outline of the class for three semesters, from Autumn Semester 2015 to Autumn Semester 2016, and introduces the international students' essays about their experiences at the Nursing Care Facilities, to make clear the significance and improvement points of this class.